

基調報告 南洋とは何か

豊田由貴夫
(アジア地域研究所副所長 観光学部教授)

上田：まず、最初に南洋というのは一体どういうようなところなのか、少し空間的な把握などのために、本学の観光学部の教授の豊田さんから話を伺いたと思います。豊田さんは東大で文化人類学を学ばれて、1996年に文学部史学科のほうの助教授として本学に赴任され、その後観光学部の交流文化に移られて研究なさっています。フィールドとしては、パプアニューギニアを中心として、島々の文化を非常に多面的に研究されています。その他、観光ということで東京ディズニーリゾートの研究をされるなど、非常に多彩な研究領域を持っております。ディズニーリゾートに学生を連れてフィールドワークに行かれたりもしております。それでは豊田さんよろしくお願ひしたいと思ひます。

豊田：立教大学観光学部の豊田です。今日はよろしくお願ひいたします。今日は二人の方の事例報告・発表がありますので、私からは前座のような話になります。南洋とは、南洋という用語とは、そしてそれにまつわる背景について、簡単に20分ほどでお話させていただきますと思ひます。

「南洋」と「南進論」

最初に南洋という言葉に関して言うておくべきことがあります。南洋という言葉を考えてときに、必ず関係してくるのは「南進論」という考え方です。南の方に進んで行って、いろいろな経済的な活動をしようとか、あるいはさらに進んで、政治的に日本の植民地にしようとか、いろいろな考え方がありますけれども、そういう「南進論」の対象になっている地域が、この南洋という言葉で表現されてきた、と考えていいかと思ひます。それを考えると、南洋と南進論は絶えず結びついている、ということになります。

それで、南洋という言葉の概略になりますけれども、明治期から漠然と太平洋の西の方と言うのでしょうか、日本に近い側を指してきました。後で言ひますが、ミクロネシア地域と呼ばれるような地域がありますけれども、これに近いです。あるいは、地域としては「南洋群島」と呼ばれていた地域です。今日の話は、この南洋群島の話が中心になると思ひますけれども、漠然と初期のころは、南洋というのは太平洋西側の地域と考えられてきたということになります。そして、その後しばらく時間がたつと、この南洋という言葉は、さらには東南アジア地域、これもかなり人によって指す地域が違っているようだけれども、漠然と東南アジア地域を指す言葉として使われてきました。

最初に、明治以降に、南へ進むという考え、つまり南進論という考え方があると言ひました。そしてこれに関連して、その対象地域が南洋であると考えられてきたということになります。初期の段階では南洋というのは、太平洋西部、今の区分で言ひますと、ミクロネシア地域と呼んでいい地域を指して言ひました。そしてその後、日本が第1次世界大戦に参戦しまして、旧ドイツ領だったこの地域を委任統治して、実質的に統治する訳ですけれども、ここが南洋群島と呼ばれるようになりますので、この地域をまず南洋と指すようになりました。

その後、ここを拠点あるいは足がかりとして、さらに南に進んでいいのではないかということで、その後東南アジア地域を含めて、南洋という言葉が使われるようになります。このような事情については、人によって指す地域も違ひまして、それから東南アジアと言ひても、当時東南アジアという考えが明確にあったわけではありませぬので、

南洋という語が指す地域もあいまいな部分もありました。ただし、大まかに考えると、その後、南洋という用語は漠然とした東南アジア地域を指すという使い方をされてきた、と考えていいかと思います。

そして南進論ですけれども、いろいろな人によっていろいろな主張がされています。そして時期もさまざま、それから主張の内容もさまざまになります。明治期からこのような思想が現れまして、それを主張した人たちがたくさんおります。多少有名な人の名前を挙げますと、榎本武揚とか、志賀重昂、それから田口卯吉、鈴木經勲などです。このようにいろいろな人がこのような思想を主張しております。

それから主張の内容も、さまざまです。この南洋に該当する地域を、日本の植民地にすべきだという考え方から、そこまでいかなくても経済的な利益を求めて進出できるのではないか、という考え方もありますし、あるいはもう少し漠然とした、冒険のような気持ちで、そこに行ってみたら良いではないかと、というような思想もありました。

それから、人によって力の入れ具合も違っているようでした。南進論を自分の一生の主張としてずっと言い続けてきたというよりは、いろいろな主張をしていた中で、そのうちのひとつとして南進論というのがあったという位置付けとして理解した方がよい場合も多かったようです。時代的には、日本が第1次世界大戦に参戦しまして、南洋群島を実質占領する訳ですけれども、その後でさらに南に進もうという考え方が活発になったと言っていいかと思います。

そしてこの南洋群島の占領以降は、南進論といいますとむしろ東南アジアを対象としまして、最終的には第2次世界大戦のもととなる大東亜共栄圏というような考え方につながっていくという考え方があります。ただし、これについてはいろいろ議論があるようでして、考え方として直接につながってはいないとか、あるいは日本の国策として大東亜共栄圏というのが出てきたが、その理念のような形で昔からの南進論というのが使われたという議論もあるようです。

「南進論」の思想

それでは次に、南進論の思想はいくつかタイプがあるというお話をしましたけれども、それを紹介いたします。

第一には、特にこのような地域を占領しようという意図はなく、あるいは経済的な利益を得ようとするだけでもなく、ただ、冒険とかあこがれの視点から、南へのロマンとして南へ進もうという考えがあったようです。初期のころ、こういうロマン的な南進論というのがあったと考えていいかと思います。

第二には、南方に行けば経済的な利益を得ることができるのだと、そういう見通しで、商業的な関心から南へ進んだらどうだろうかという考え方があったようです。これもその後、日本の植民地にしようとか日本の領土にしようというところまではいかなかった考えとしていいようです。

それから最終的には、言い方はいろいろあるかと思いますが、政治的関心というのでしょうか、南方へ進んで日本の植民地にしよう、日本の領土を広げようと、こういう考え方がありました。

以上、とりあえず三つに分けてみました。ただし、人によってこれらの重きの置き方は違っているようで、冒険のような関心から南進論とした人もいますけれども、人によってどれかに分類されるというよりは、一人の人の中にもロマン的な思いがあれば商業的な関心もあったと言っていいかと思います。また、人によっては、政治的な関心が中心だけでも、同時に経済的な関心もあるというように、同じ人の中でも上に示したような関心がいくつか混じり合っているというような傾向があったようです。

続いて、南進論という考え方と同時に、その背景にあった当時の考え方というのをいくつか示してみたいと思います。

一つは、まず南洋というのは日本人の海外進出に適切な地域であるという考え方です。それは、日本の少し昔の風景あるいは日本の田舎の原風景に似ているなど、日本との同質性をそこに見いだして、日本が進出するのに適切な地域であると考えたようです。であるから、日本人がそこに行くのはある程度納得ができるという考え方です。

もう一つは、その前のこととも関連するのですが、それを踏まえて、であるからヨーロッパ人が統治するよりは日本人が統治する方が当然なのだという考え方です。日本人が統治するのは当然であり、適切なのだと、こういう考え方につながっていく背景もあったようです。

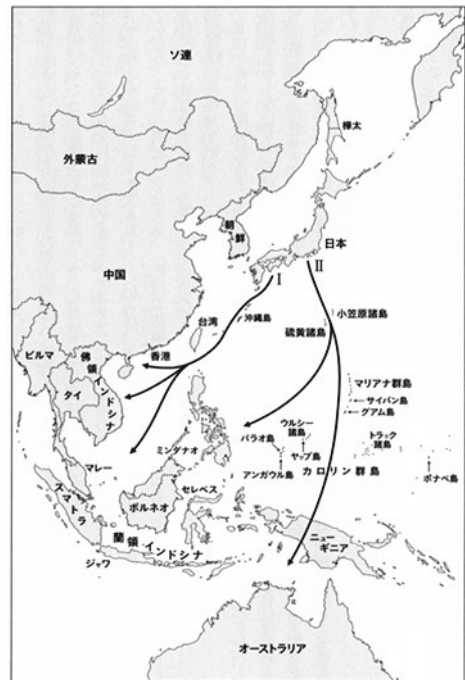
それからもう一つ、南洋という地域はまだ十分に発達していないということを強調する考え方がありました。したがって、それを開発、指導するのは日本の使命であるのだという考え方です。そういう考え方がある一方で、今まで日本では、あまり南に対する関心というのは十分でなかったという考え方が同時にありました。もっと南洋や日本の南の海に関心を持ってほしいというように、日本人の南洋、あるいは南、あるいは海に対する関心の低さを嘆くような論調もありました。

最後にもう一つ、南進論の背景としてあったのは、日本人が南の方へ進出することによって、当時あるいはそれまで日本が抱えていた、社会的、経済的問題が解決するのだ、という考え方です。職がなかった士族を将来どうするか、というような問題を考える時に、ある程度の人口が南方に進出すれば、日本のいろいろな問題が解決するのだ、という考え方も背景にあったようです。

それでは**図1**の地図をご覧ください。これは矢野暢の『日本の南洋史観』という本からとったものです。彼に言わせると、日本の南進論、南に進む考え方というのには、二つの方法、道筋があったということになります。

一つは、初期の南進論の対象である、南洋と呼ばれたミクロネシア地域に進むという南進論です。ここからさらには、フィリピンに進んで、そこを元にしてニューギニアとかオーストラリアにまで進むという考え方になります。

もう一つは沖縄・台湾を経由して東南アジア大陸部あるいは島嶼部に進んだらいいだろうという考え方です。初期の南進論と言いますと、大体対象は、このミクロネシア地域と呼んでいる、この地図で示した地域でしょうか。そして、ここを南洋群島として統治するようになってからは、そこを足がかりとして進もうという考え方がありました。もう一つは台湾を足がかりにして、さらに東南アジアに進もうという考え方です。



注) 1. Iは「第一線」を示し、IIは「第二線」を示す。
2. 地名は、第二次世界大戦前のものである。

図1 南洋移民の方法・道筋

〔矢野暢『日本の南洋史観』〕

南洋群島・内南洋・外南洋

それでは、今日のお話の南洋群島のお話になります。後で詳しく出てくると思いますが、私の方からもごく簡単に紹介させていただきます。

今ではミクロネシアと呼ばれている地域になります。区分としては北マリアナ諸島、パ

ラオ、マーシャル諸島、ミクロネシア連邦が該当する地域になります。1914年に第1次世界大戦で、それまではドイツ領でしたけれども、その後日本がドイツに宣戦布告した後、日本海軍が占領しまして、その後委任統治領になったという経緯があります。そしてこのことによって、日本人の南方全体の関心が高まりました。ここを拠点として、あるいは足がかりとして、さらに南へ進んでいいのではないかという話が高まるきっかけになったと考えていいかと思います。

それからもう一つの言葉として、内南洋・外南洋という言葉があります。これは先ほどの南洋群島の方は、日本の統治下に入りましたので、東南アジアと区別するために、こちら側を内南洋と呼びました。あるいは裏南洋という言葉も使われていたようです。日本の内側の南洋ということになります。そして、そこの外に存在する地域には、外南洋という言葉が使われました。あるいは表南洋ですね。今の東南アジア地域に該当する地域ということになります。

そういう意味で言いますと、初期の南進論というのは、内南洋を対象としていて、結果として南洋群島が日本の統治下になったということになります。そしてその統治下になった後、つまり内南洋占領の後には、南進論というのは外南洋を対象地域とするということになったという言い方ができるかと思います。これが、内南洋と外南洋という言葉の使い分け、あるいは、裏南洋・表南洋という言葉の使い分けになります。

「南洋」のイメージ

次に伝えておくべきこととして、当時の日本で南洋に関してどのようなイメージが持たれていたのか、ということです。これについては、いろいろな表現がされています。一般的には、野蛮で無知蒙昧な「土人」、これは今では禁止用語ですけども、このような「土人」が住む未開の土地というようなイメージが非常に強かった、と考えていいと思います。西洋ですと、これと一緒に「高貴な野蛮人」というのでしょうか、平和に暮らして、特に紛争もなく自由にのんびり暮らしている、というイメージが同時にありました。このような2つ矛盾するようなイメージが南洋にはありますけれども、日本では後者のイメージというのはどうも少なかったようで、高貴なる野蛮人という考え方は、あまり出てこなかったようです。食べ物にそれほど困らない地域ということは伝わっていたようですが、それが必ずしも平和で自由に暮らしているというイメージにはつながらなかったようです。

これらが基本的なイメージです。野蛮で無知蒙昧な「土人」が住む未開の土地ということです。それから、非常に気候が厳しいというのでしょうか、特に東南アジアに関するイメージになるかと思いますが、温度が高い、湿度も高い、ジャングルだというようなイメージがありました。そして、そこで暮らすのは非常に大変だ、というイメージがあったかと思います。

そしてそれと同時に、もう一つは、そういう非常に暮らすのが厳しいというイメージもあったのですが、同時にそこには、潜在的な経済的な見通しというのがあるというイメージもありました。つまり何とかうまくやれば利益を得られる、そういう地域だというイメージです。非常に植物が育つのが早かったりしますので、適切な作物などを植えて適切に管理すれば利益を得られる、そういう土地なのだというイメージもあったようです。このような点も南洋というのを考える上に重要な点と考えていいかと思います。

沖繩と南洋

そして最後に、今日のテーマにつながる話になりますが、沖繩と南洋ということです。沖繩と南洋の関係で言いますと、この日本が委任統治領とした南洋群島に、沖繩から非常に多数の移民が住むようになりました。そして、いろいろな移住の理由が言われているの

ですが、文書に残っている理由をいくつか挙げました。どのような理由で沖縄からたくさんの方が行ったのだろうか、ということが議論されています。文書に残っているものとして、以下のような表現があります。

まず、沖縄は人口が多くて、海外へ出ようという思想があったということです。それからもちろん気候が同じようなので、沖縄の人たちは熱帯的気候に慣れている、という考え方は、それから沖縄では、人口を支える産業に欠けているので、一定数の人が南に行けばそれが解決するという考え方は、こういうようなことから、沖縄から南洋群島へ多数の人々が移住した、移り住んだということが言われています。ただ、これもあくまで表向きの文書に出ている理由ですので、もう少し実際の理由がいろいろあるかもしれません。ここではこの表向きに出ている理由を、とりあえず紹介させていただきました。

それから、旧南洋群島にどれくらい日本人が移住したのだろうか、という点です。**資料1**は南洋群島の人口を1920年から5年ごとに示したものです。見ていただくと分かるのですが、現地の人たちは大体5万人くらいで推移しています。もともと、5万人くらいの人口が住んでいた地域ということですから、これに対して日本人ですが、1920年の段階では3,671人という数字

	日本人	島民	外国人	計
1920	3,671人	48,505人	46人	52,222人
1925	7,430人	48,798人	66人	56,294人
1930	19,835人	49,695人	96人	69,626人
1935	51,861人	50,573人	103人	102,537人
1940	84,478人	51,106人	124人	135,708人

資料1 南洋群島の人口（1920-40）

〔中山和芳「歴史時代のミクロネシア」〕

があります。しかし5年後ではその倍になっていまして、さらに1930年ですとさらにその3倍近くででしょうか、2万人近くになっています。1935年の段階ですと、島民よりも日本人の数が多いという状況になっていく、ということです。

そして1940年になりますと、島民が5万人くらいいましたが、日本人は8万人以上です。全体で13万5千人くらいですが、そのうちの8万5千人くらいは日本人であるという、こういう状況でした。そして沖縄の人なのですけれども、これも後で藤林先生の方から詳しい数字が出ているようですが、日本人の半数というか、だいたい半分以上が沖縄出身の人だったというようです。

ですから、やはり沖縄と南洋の関係というのは、いかに深いかというのが分かるかと思えます。私のお話は、概略ということで、とりあえず参考程度にここにご紹介させていただきました。どうもありがとうございました。

質疑応答

フロアA：私は元ジャーナリストなのですが、中国は今、ミクロネシアに対して非常に戦略的な関心を持っていると感じています。他方、日本は戦前にいろいろな関心を持っていた割には、今はあまり関心を持っていないのではないかと、思っています。そのところの意味をどのようにお感じになっていますか。

一方で、観光やダイビングなどで日本からミクロネシアに行く人は結構多いと思います。観光開発という点では、環境を破壊しない形での観光開発の対象地域として、非常にうまくいく可能性があると思いますが、この点はどうでしょうか。

豊田：まず、ミクロネシアに限らず太平洋地域では、中国は非常に力を入れています。これはどういう意味があるかという点、ミクロネシア地域では国の単位がいくつかありますが、国が非常に小さいので、国際協力とかという場合には国際社会の中で票を稼ぎやすいというのでしょうか、例えば国連の決議案で、一国一票という原則がありますので、そう

しますと、援助などで投資する場合に、投資の効果が大きく望まれる地域という位置づけがあります。どういうことかといいますと、少額の援助で自国に好意的になってくれるという、こういう小さい国が多くて、そういう面では、中国だけではなく戦略的に援助の対象とするという性格はあります。

例えば、中国と競合する台湾も、非常にこの地域に援助をしているという状況があります。台湾を独立国として認めてくれるという、自分たちの国の支援の側に回ってくれる可能性が高い、その割に援助などの投資は少なくて済むという、票として重要な地域という性格があります。その意味で中国が非常に力を入れています。そして、ミクロネシアだけではなくて中国は他の太平洋地域でも非常に力を入れています。

日本も力を入れてないわけではないのですが、中国の援助などが大きすぎるので、そちらの方が目立つのではないかと思います。日本もかなり力を入れている、というように考えていいと思います。島サミットなどを行って、こういう地域の人たちを招待して、協力を組織的にやっているかと思っています。これが第一点目の質問のとりあえずの答えになります。

それから観光に関して。ミクロネシアは日本に近いということもありまして、うまくいく可能性は非常に高いのではないかと思います。ダイバーの方とかも多数行きますし、いろいろな可能性を秘めているかなと思っています。これからも観光という意味では発展が見込まれるのではないかと思います。

参考文献

中山和芳「歴史時代のミクロネシア」

(石川栄吉編『オセアニア世界の伝統と変貌』山川出版社、1987)

矢野暢『「南進」の系譜』中公新書、1975

矢野暢『日本の南洋史観』中公新書、1979